

## 『Yの悲劇』を推理しながら読もう！

まず、あなたが瀬戸川猛資氏のように、「すべすべした頬」で、犯人が子供だと見抜いたとしましょう。しかし、『Y』に出て来る子供は二人いるのです。それに、女性だって「すべすべした頬」ではありませんか。なぜ、無条件でジャッキーを犯人だと決めつけてしまうのでしょうか。「ジャッキーが犯人だと一番意外だから」という理由は駄目ですよ。クイーン作品は“作中の”探偵が論理的な推理で犯人を特定するのが魅力なのですから、読者のみなさんも、作中の立場だけで考えなければいけません。

ジャッキー以外の容疑者を消去するには、犯人の身長を推理する必要があります。そしてもちろん、読者のみなさんが、実験室の薬品棚と椅子という手がかりに基づいて推理をすれば、犯人の身長が特定できます。言うまでもありませんが、そうなるように、プロットがきちんと組み立てられているわけですね。

犯人の身長を特定できる手がかりは、もう一つあります。それは、「すべすべした頬」の手がかりの背後に巧みに隠されていました。「証人が犯人の頬に触った」という手がかりによって、読者は犯人の身長がわかるようになっているのです。「すべすべした」だけに着目して、「手を伸ばした先に頬があった」というデータを見落とした読者は、まんまと作者に欺かれたと言えるでしょう。

お次は、「犯人と同じ身長の持ち主がジャッキーしかいない」ということを推理しなければなりません。こちらの手がかりは、ハッター家の住人の診療記録として提示されていました。これもまた、「ハッター家の狂気は梅毒によるもの」というデータを提示する陰で、ひっそりと提示されていたわけです。みなさんは、身長データにも気づきましたか？

さてさて、ここまで推理を重ねてジャッキーが犯人だと特定できても、満足してはいけません。犯人は特殊な毒薬を自在に使いこなしていますが、これは子供には不可能だからです。従って、次は、この不可能を可能にする推理を考えなければなりません。

その答えは、「自殺したヨーク・ハッターが残した探偵小説の梗概」でした。化学者であるヨークは、自分を抑圧する妻を殺害する探偵小説を書き、ストレスの解消をしていました。ジャッキーは、この梗概を読んで、その通りに殺人を行ったのです。

ここまで進めると、『Yの悲劇』の犯人はヨークだとも考えられるのではないかと、という解釈が生まれます。犯人はヨークで、ジャッキーはその道具に過ぎないという読み方ですね。あるいは、ヨークが計画、ジャッキーが実行、という分業とも考えられるでしょう。

ちなみに、江戸川乱歩氏の〈トリック分類〉では、こちらのアイデアは、「年少者が犯人トリック」とは切り離され、「筋書殺人トリック」に分類されています。しかし、この二つのアイデアは、分けてしまっただけでは、その素晴らしさが伝わりません。

筋書きがあったからこそ、年少者でも複雑な犯行を実行できたのです。

年少者だからこそ、筋書きの不明部分を勝手に解釈したり、馬鹿正直に不必要な箇所まで実行して、奇妙な謎が生まれたのです。

それに加えて、ヨークが書いた文書が、〈殺人計画書〉ではなく〈探偵小説の梗概〉だったという点も、見落としはなりません。

実行犯ジャッキーは、犯行時に、ヨークを指し示す“バニラの匂いの手がかり”を意図的に残します。もちろん、そうするように梗概に書かれていたからですね。

殺人計画書ならば、わざわざヨークを指し示す手がかりを残すメリットはありません。探偵小説、すなわち最後には犯人が暴かれる物語の梗概だからこそ、真犯人ヨークを指し示す手がかりを残す必要があったわけです。

何という驚くべきプロットでしょうか。クイーンは、「探偵小説の梗概を何も考えずにそのまま殺人計画書として用いる年少者の犯人」というアイデアにより、「実行犯が、既に死去している（ので容疑を転嫁する意味がない）計画犯を実行犯として指し示す手がかりを“意図的に”残す」という、奇妙でねじくれたロジックを生み出したわけです。

さあ、あなたはここまでで、犯人がジャッキーであることがわかりました。そして、なぜ年少者であるジャッキーが、大人の頭脳が必要な犯罪を実行できたのかもわかりました。

——しかし、物語の終盤で、あなたは驚愕するに違いありません。なんと、ジャッキーが殺されてしまうのです。しかも、他殺としか思えない状況で。

ジャッキーは実行犯ではなかったのでしょうか？ それとも、計画犯ヨークが生きていて、邪魔な実行犯を始末したのでしょうか？ あるいは、計画犯はヨークではなかったのでしょうか？ ひょっとして、これまでの推理はすべて間違っていたのでしょうか？

最終章では、ジャッキー殺しの犯人が明らかになりますが、その正体は——シリーズ名探偵のドルリー・レーン！ 彼もまた、“『Yの悲劇』の犯人”と言えるわけです。

そして、レーンがジャッキーを殺した動機は、「殺人の味を覚えたジャッキーは、ヨークの梗概を離れ、自分の意志で殺人を行おうとした。だが、未成年である彼を、法律で死刑にすることはできない。ならば、私の手で死を与えるしかない」というもの。ここでも「年少者が犯人」というアイデアが巧みに使われているわけです。

しかも、レーンによるジャッキー殺しは、読者を真相から遠ざけるだけではありませんでした。シリーズ全体に張られた伏線の一つでもあったのです。ここでは伏せておきますが、シリーズ全四作を読めば、この文の意味がわかるでしょう。

ジャッキー、ヨーク、レーンという三人の犯人。彼らはそれぞれ異なる目的のため、それぞれ

れ異なる行動を取りました。そして、その行動が互いに関わり合い、影響を及ぼし、複雑な謎とロジックを生み出しているのです。

当たり前の話ですが、本をどう読むかは、読者の自由です。それを百も承知の上で、私がいろいろ書かせてもらった理由が、これでした。この複雑きわまりない謎とロジックに対して、「犯人は、ジャッキー・ハッター少年に決まっているじゃないか」と決めつけては、あまりにももったいないと思ったのです……。

(別ページ終わり)